

金承哲著

「神と遺伝子—遺伝子工学時代におけるキリスト教」を読む

(教文館、2009年)

松浦剛

本書の帯の部分に、クローンは神への冒瀆か？ ヒト・クローンは許されるのか？と書かれている。遺伝子工学に対する現代神学の3つほどの立場を考察し、人間が神を演じてよいのかどうか論じられている。

著者・金承哲について

金承哲(キム・スンチョル)は、1958年に韓国の首都ソウルで生まれた。高麗大学理学部卒業、メソジスト神学大学院修了。スイス・バーゼル大学神学部博士課程修了。神学博士(Dr.Theol.)。1991～2001年釜山神学大学教授。2002年～現在金城学院大学人間科学部教授、大学宗教主事(専攻:組織神学、生命倫理)。

クローン羊ドリー誕生

本書執筆は、1996年7月5日にスコットランドのロスリン研究所で体細胞核移植という手術で誕生した1匹の羊の記述から始められている。

ドリーと名付けられたこの羊は、オスとメスの交尾による繁殖ではなく、クローニングという方法で生まれた。それ故に、クローン羊ドリーと呼ばれるようになった。

クローン羊はどのように生み出されたのであったか。成長したメスの羊Aから乳腺細胞を取り出し、その体細胞から核のみを取り出す。また、別の羊Bから採取した卵子細胞から核を除去する。この卵子細胞に羊Aの核を移植する。卵子細胞に電気刺激を与えると、精子と卵子との接合による受精卵のように細胞分裂が起こる。その卵子細胞を他の羊Cの子宮に着床させ、出産させる。やがてドリーが誕生した。

羊Aの遺伝子とドリーの遺伝子は全く同じものである。遺伝子が細胞の核に入っているからである。遺伝子的観点からいうと、羊Aの複製としてドリーが誕生したことになる。

クローニング技法によって誕生したドリーがはたして生存の可能性があるのかどうかを見定めた上で、7カ月後の1997年2月23日に公表された。羊の複製ができるということは人間の複製もできることになる。「もう一人のあなたがいてもよいのか？」という問いは、自然科学的関心よりも宗教的関心を引き起こした。そして、人間が神を演じること

が許されるのか否かが神学者によって論じられるようになった。

神を演じてはならない

神を演じてはならない——この主張をする論者の代表がポール・ラムジーである。本書において、ポール・ラムジーがどのような神学的倫理観を示すのかを紹介している。

神は世界の創造主である。人間は、神に絶対的に依存すべき被造物にすぎないと自覚する。神をそう認識することで、技術的には可能であったとしてもやってはならないことがあるとの根拠が与えられている。神という価値の無限な中心が正しく認識される限り、人間には野望を満たせる知識を入手しても、神を演じてはならないという倫理的意識が芽生え始める。神という垂直的地平が消えてしまうと、水平的次元においても倫理的違反が行なわれ、人間は神を演じる行動に踏み切ることになる。

ポール・ラムジーは、遺伝子的コントロールの手段を講じるのはキリスト者の道ではないとする。彼は、科学者や遺伝学者の自由によって人間の尊厳が破壊される、と警告を発している。

神を演じているのか？

ポール・ラムジーとその支持者たちが、ヒト・クローンが神を演じているとして反対したのに対して、ロナルド・コール・ターナーは別の問いをする。はたして神を演じているのか？と。ヒト・クローンの可能性について研究することは大切ではないか、との考えを示している。これから行われる神の創造活動に、人間として協力するとの理解ができるのではないかと主張する。

人間の生存と農業生産とは深く結びついている。育種という遺伝学的成果によって、地球上の多数の人間の命が保たれてきた。遺伝子工学が神の内における新しい創造という目的のために使われるのであれば、それは神の活動の延長として捉えることが可能であると考える、それを神が参与する遺伝子工学とも呼ぶことができる、と論じられている。いわば、遺伝子工学を神の継続的創造と受けとめることができるとする。

神を演じよう！

神学者ジョセフ・フレッチャーは、神を演じようとの思想を表明している。ジョセフ・フレッチャーによれば、ヒト・クローンは生物学的革命がもたらせた変化の極限であり、私たち人間はだんだん被造物から創造者の地位に向かっていくことを示す証左でもあるとする。

ヒト・クローンは、人間が自分の先天的所与を一方的に受け入れる受身的態度から脱皮して、自らの未来を星の中においてではなく、我々人間の中に求めることを意味する。テクノロジーは、善悪という永遠の課題を非常に新しい形態で提起するものである。人間の行動が正しいかどうかを決める基準は、その行動が人々を助けるのかそれとも害をなすものか、その行動が強要されたものなのか、それとも自由に選択されたものなのかということにある。人間の必要性と幸福という基準によって賢明なものだと判断されれば、それは善であり、正しいことといえる。ならば、神を演じようではないか、と勧められている。

著者によるまとめ

以上3つの神学的主張が紹介された上で、本書の著者・金承哲は本書執筆の時点で考えられるご自分の判断を示している。

神の協力者として神を演じる——と発言したロナルド・コール・ターナーの発言に相当の評価を与えている。神を演じてはならない、と言いきってしまうと自然科学的思索に心を閉ざし、キリスト教と自然科学との対話を拒否するかたちとなる。いわば、自然科学を敵に回してしまう。

それかといって、神を演じようという考え方に乗ってしまうこともできない。人間の行動が正しいかどうかを決める基準は、その行動が人々を助けるのかそれとも害をなすのか、その行動が強要されたものなのか、それとも自由に選択されたものなのかどうかということにある(ジョセフ・フレッチャー)、と結論付けてしまうことにも決断しかねる。ヒト・クローンを承認することで人間が助けられることからを幾つも数え上げたところで、現実のキリスト教の世界からヒト・クローン不承認の声が上がるのは目に見えている。

著者自身の常識と信仰からしても、ジョセフ・フレッチャーの考え方に賛成できないのであろう。著者は生物学者バーバラ・カズ・ロスマンの言葉を紹介している。「比較的最近まで、私たちは生命の意味に関する問いに対する答えを外で探していた。しかし今は、内面の奥底、つまり、細胞の核の内を見つめている。」と。

万物の中心としての神の代わりに、自分自身のうちに万物の中心を置いていた近代の人間は、今度はその中心としての自己が複製される状態に直面して啞然としている。自己という中心が複数存在するならば、当然その中心はもはや中心ではありえないからである。DNAをめぐる遺伝子工学的議論は、神学における、いわば人間的転換からの更なる転換を要請するといえよう——と著者は記述している。

著者は、ピエレ・バルディの言葉を引用して、ほぼ妥当と思える考えを読者に提示する。「クローニングという現象はすでに醸成しているので、それを回避しようとするのは無駄である。私たちがクローニングの意義と結果を理解しようとするならば、私たちはその方向に心を動かす方がよい。歴史を通して私たちは、私たちの世界観と現実を調節する仕事

が、結局のところより合理的で、より有益な解決に帰着するというを知っているのである。」と。

私自身の読後感

私は、本書の著者と少なからず交流をしてきた。我が家の三女が金城学院大学人間科学部の学生となり、卒業後も大学院で2年間学び、合計6年間大森のキャンパスに通った。著者は大学宗教主事として三女を適切に導いてくださった。また、私を何回もキリスト教センターにおける早朝礼拝説教者として招いてくださった。

2009年に著者が本書を出版され、購読してみると、著者が生命倫理について深い関心を持っておられることを知って、驚くとともに敬意を抱いた。そのようなわけで、本書には相当ぶち当たってはみた。キリスト教生命倫理の課題は重々しくて、なかなか歯が立ちにくい。信徒から生殖医療についての牧師の見解を求められることもある。だが、日進月歩、ものすごい勢いで前進していく医学・医療の世界について行けないし、キリスト教の世界からの意見を述べることもできないでいた。

クローン羊ドリーの誕生以後、論じられている遺伝子工学に対しての神学者の所論と著者自身の観察を知ることができて、私はその方面への理解ができた。著者はあとがきにおいて「本書はまだあまりにも小さな試みに過ぎない。」と記している。著者の腰の低い姿勢をうかがえる言葉であると同時に、取り上げた課題が大きすぎて処し切れないもどかしさがあるように推察する。

私が若き日に学んでいた大学の農学部では、すでにクローン牛を誕生させている。その技術レベルを誇りに思う。しかし、クローン牛誕生の意味が母校において真剣に論じられていないようで、不満であるし、危惧を抱く。私には発言する力は持ち合わせていないのであるが、不問に付すことも不真実な態度のように思えてならない。本書は、キリスト教の世界から実った著述としてユニークである。本書を手にしてよかったと感謝している。

(日本イエス・キリスト教団・名古屋教会牧師)

